

# 大学生におけるセルフ・ハンディキャッピング行動と 性格特性の関係について

## The Relationship between Self-handicapping Behavior and Personality Traits of University Students

松 田 隆 世      菅      千 索  
Ryusei MATSUDA      Sensaku SUGA  
(教育学部第64期生)      (心理学教室)

2017年9月15日受理

### 要約

セルフ・ハンディキャッピング(SHC)とは、課題遂行に先立ち何らかの条件設定あるいは具体的行動を行うことで、結果の成否を問わず自己に有利な状況を作り出そうとするものである。本研究では、大学生106名に対してSHC傾向の高低および性格諸特性を調べて、両者の関係について分析を行った。その主な結果として、他者意識と抑うつ傾向がともに高水準にある人は、SHCに頼る傾向が強くなることなどが実証的に示された。

### 問題と目的

#### 1. セルフ・ハンディキャッピングとは

セルフ・ハンディキャッピング(self-handicapping; 以下SHCと表記)とは、自分の失敗を外的条件に求め、成功を内的条件に求めるための機会を増すような、行動や行為の選択のことを指す概念である。自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつ、そこで高い評価を受けられるかどうか確信が持てない場合、遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり、自らハンディキャップを作り出したりする行為をいう。あらかじめ主張しておいた、あるいは実際に作り出したハンディキャップのために、たとえ失敗した場合でも、失敗の原因がそのハンディキャップのせいにされるために、自分自身に対する否定的な影響を最小限に止めることができる。また、成功した場合には、ハンディキャップを乗り越えて成功したということで、自分の能力の高さが過大に評価されて、自己イメージの高揚につながる。

いくつか例を考えてみる。試合の前に、怪我による練習不足を周りに強く主張するスポーツ選手を例にあげる。この選手がその試合で負けたとしても、負けの原因として、怪我による練習不足を思い浮かべるため、実際に相手より実力が劣っていたということが曖昧となり、彼の自己イメージは傷つかない。また、もしも、この選手が試合に勝ったなら、練習不足にも関わらず勝ったということで、彼の実力が過分に意識される。この他にも、頭は良いのに勉強をしようとしないうちに成績の悪い少年、異性と付き合う良い機会があるのにそれを利用しない独身者、重要な試験の前の晩に十分な睡眠をとらずに試験に臨む学生などが、SHC行為

者の例と考えられる。

Arkin & Baumgardner(1985)は、それまでの研究で報告されてきたSHCの形態を、ハンディキャップの位置が個人の内部にあるか(内的)、外部にあるか(外的)という次元と、ハンディキャップが実際の行動として遂行されるか(遂行的)、言語的に主張されるか(主張的)という次元によって分類した。

#### 2. SHCの成立と諸研究

SHCについての研究は多くなされている。社会心理学においては、SHCは2つの理論的背景の下で登場してきた(Higgins, 1990)。1つは印象操作研究であり、1990年代半ば以降、精神病患者が重要な個人的利得を獲得するために、自らの症状の呈示を操作していることを明らかにした。もう1つは原因帰属研究である。そこでの素朴心理学(naive psychology)は、以降の原因帰属の様々な理論に影響を与え、人が日常生活の中で行っている対人知覚や因果理論の過程を明らかにしてきた。さらに、1970年代に入って、原因帰属の体系的な歪みを扱うようになり、自尊心の維持や高揚といった動機に影響された認知や行動が注目されてきた。

Jones & Berglas(1975)は、薬物使用者に特徴的な自己呈示行動について記述した。その行動は、人が帰属の原理に関する暗黙の知識を所持しているだけでなく、自分の行動についての帰属を形成するために、活発に環境を操作することを意味しており、Jones & Berglas(1978)によって“self-handicapping”と名付けられた(Higgins, 1990)。Jones & Berglas(1978)は、SHCを“失敗を外在化し、成功を内在化する機会を高めるような行動や状況の選択”と定義した。

Baumgardner(1991)は、ネガティブ・ムードが影響する課題では、第1課題での成功を実験者が知っている場合と、失敗を知らない場合の双方において、抑うつ者が非抑うつ者よりもネガティブ・ムードを多く報告することを見出した。この結果は、抑うつ者が自分自身の抑うつ徴候をSHCとしている可能性を示唆するものであり、抑うつ者の示す抑うつ徴候が自己防衛のための戦略的自己呈示であるという主張を支持している。

SHCを自己呈示手段として考えると、他者の印象に対して非常に敏感な人は、SHC行動をとりがちだと予想される。Shepperd & Arkin(1989)は、公的自己意識の高い男性被験者が、自我関与課題を遂行する前に、SHC(課題を抑制する音楽の選択)を採用することを認めている。

自尊心とSHCとの関係に関する研究も行われているが、残念ながら数は少なく、結果も一貫していない。Harris & Snyder(1986)では、自尊心の高低とSHC行動(練習の差し控え)との関係が認められていない。これに対してTice & Baumeister(1990)は高自尊心者が実験者の前で課題の練習を控えることを見出している。またHarris *et. al.*(1986)は、自尊心の高い女性およびテスト不安の高い女性が、課題の前に自己防衛的な帰属をすることを報告している。

Rhodewalt(1990)は、これまでに行われたSHC研究を、被験者の性別という観点から整理している。女性被験者のみを用いた7件の研究は、すべて主張的SHCを扱っており、遂行的SHCを扱った研究のほとんどは男性被験者によるものであった。女性が男性と同様に遂行的SHCを採用することを認めた研究は2件のみである。また性差を分析した7件のうち5件において、男性が女性よりもSHC行動をとりやすいことが報告されており、これはShepperd & Arkin(1989)によっても確認されている。7件のうち1件では性差は認められず、女性が男性よりもSHC(努力の低減)を採用しやすいとの結果は1件(Rhodewalt & Fairfield, 1989)のみである。全体としては、男性が女性よりもSHC、とりわけ遂行的SHCを採用しやすいという傾向が認められている。これは、男性は非随伴的成功を能力に帰属するため、次課題での遂行の不確かさが能力に対する脅威となってSHCを採用するのに対し、女性は成功を外的要因に帰属しやすいため、次課題での遂行に対する脅威がなくSHCを採用しにくいと考えられる(Berglas & Jones, 1978)。

### 3. 本研究の目的

本研究では、どのような人がSHCを採用するのかを、大学生を対象として自尊感情や自意識、他者意識、抑うつ感といった性格特性との関連について明らかにする。その際、以下の予測を設定した。

予測1: “「自尊感情」が高い者ほど、SHC行動を選択しやすい”

自尊感情の高さは、自分自身を「これでよい」と感じている状態を示している。一方で自尊感情が低いということは、自己拒否など自己に関する尊敬を欠いていることを意味している。このことから自己に関する尊敬が高いものほど、自己や自身に対する評価を傷つけないため、それを守るためにSHC行動をとりやすいと予想される。

予測2: “公的自意識・他者意識の高い者ほど、SHC行動を選択しやすい”

自意識の中でも、外見など外から見える「公的自意識」、内面や気分など外から見えない「私的自意識」がある(Fenigstein *et. al.*, 1975)。これまでの研究から「公的自意識」の高い人は他者からの評価の態度に敏感であることが明らかにされている(Fenigstein, 1979)。このことから他者の評価との関連がある「公的自意識」の高い者ほどSHC行動を選択しやすいと考えられる。

また他者意識は、意識が他者に直接的に向けられるものである「内的他者意識」「外的他者意識」と、他者の空想的イメージに向けられる「空想的他者意識」に大別される(辻, 1993)。他者への意識が敏感な人ほどSHC行動を選択しやすいと考えられるが、その3つの他者意識の中でもより関係性のあるものは何かを検証していく。

## 方法

### 1. 被験者

和歌山大学教育学部に所属する大学生106名。学年別および男女別の人数の内訳を表1に示す。なお、3・4年生はごく少数であったため、2～4年生を「2年生以上」として分析を行った。

表1 被験者の内訳と合計

		性 別		合 計
		男	女	
学 年	1 年	27	18	45
	2 年	37	21	58
	3 年	1	0	1
	4 年	1	1	2
合 計		66	40	106

### 2. 質問紙

#### (1)ベック抑うつ尺度

本尺度はBeckらによって開発され(Beck *et. al.*, 1961; 1979)、林(1988)および林・瀧本(1991)により日本語版が作成されている。最近の1週間における抑うつ状態の重症度を測定する自己記入式尺度であり、21の主要な抑うつ症状から構成されている。採点方法は

0～3の4件法をとっており、どの項目も点数が高いほど抑うつ症状が重くなるように作成されている。

#### (2) 自意識尺度

本尺度は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差(自意識特性)を測定するもので、菅原(1984)が開発した。他者に見つめられたときや、鏡に自分を映したとき、人は多少なりとも自分自身を意識する。またこうした状況以外に、個人の性格特性も自意識の高まりを規定する。Fenigstein *et. al.* (1975)は自己に向けられる意識には、私的自意識と公的自意識の2つがあることを示した。そして私的自意識・公的自意識の強さを測定する尺度を作成し、これに対人不安尺度を加えた自意識尺度を開発している。わが国においてこれらの自意識を測定するための尺度はFenigstein *et. al.* (1975)を日本語訳する形でいくつか作成されているが、菅原(1984)は、抽象度の高いFenigstein *et. al.* (1975)の尺度をそのまま翻訳することの難しさを指摘し、独自の立場から自意識尺度の日本語版を作成することを試みた。採点方法は「1. まったくあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. ややあてはまらない」「4. どちらともいえない」「5. ややあてはまる」「6. あてはまる」「7. 非常にあてはまる」の7件法で、各尺度について項目の合計点を算出する。

#### (3) 他者意識尺度

辻(1993)によって開発された、他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定するための尺度である。他者意識とは他者に注意や関心、意識が向けられた状態をいい、注意の向けやすさに関する性格特性を他者意識特性という。本尺度は他者意識特性に関する個人差を測定するために構成されたものである。辻(1993)の他者意識理論によれば他者意識は意識が現前の他者に直接向けられているか、それとも他者の空想的イメージに向けられているかによって大別される。前者は現前する他者という現実の拘束を受けるため、明瞭に内面あるいは外面への意識・関心に分化する。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識や関心を「内的他者意識」、他者の化粧や服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心を「外的他者意識」という。一方、後者は他者が現前しなくとももつことができ、現実の拘束からも自由であるため、内面や外面への意識の分化は行われない。このような他者意識を「空想的他者意識」といい、他者について考えたり、空想をめぐらせたりしながら、その空想的イメージに注意を焦点づけ、それを追いかける傾向を意味する。以上が辻(1993)による他者意識の3分説の概要であり、本尺度はここで述べた「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」の3つの下位概念を測定することを目的として構成されている。採点方法は、下位尺度ごと

に、各項目への回答値(選択肢の数値)を合計して尺度得点を算出する。

#### (4) 自尊感情尺度

本尺度はRosenberg(1965)が作成した尺度の山本ら(1982)による翻訳版である。自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。Rosenberg(1965)は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている。また、自尊感情の高さを示すのは、自身を「非常によい(very good)」と感ずることではなく、「これでよい(good enough)」と感ずる程度だと考えており、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に関する尊敬を欠いていることを意味するとしている。採点方法は、5段階評価(あてはまる＝5点、ややあてはまる＝4点、どちらともいえない＝3点、ややあてはまらない＝2点、あてはまらない＝1点)であり、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味する。

#### (5) セルフ・ハンディキャッピング尺度

本尺度は、沼崎・小口(1990)によるセルフ・ハンディキャッピング尺度であり、Jones & Berglas(1978)による25項目版をもとに日本人への適用性を考慮して作成された。セルフ・ハンディキャッピングとは、課題遂行に失敗した結果として自己評価や社会的評価の低下が予想される場面において、あえてその遂行を妨げるような行為を行ったり、自己の弱点や問題点を表明する過程であったりする。こうすることで失敗してもその原因は個人の能力に帰属されにくいので評価の低下を抑えることができる(割引原理)、成功した場合には、ハンディキャップを乗り越えるほど高い能力があるとみなされる(割増原理)。本尺度はこうした自己呈示的戦略を用いやすい程度に関する個人差を測定しようとするものである。採点方法は、「非常によく当てはまる」を6点。「まったく当てはまらない」を1点として、23項目の合計を算出する。理論上は23点から138点まで分布し、点数が高いほど、セルフ・ハンディキャッピングを採用しやすいといえる。

### 3. 手続き

調査時期は11月17日から12月16日までであり、集団式で授業中にアンケート調査を行った。最初に研究への協力依頼および一般的なプライバシー関連等の説明を行った後、フェイスシート、ベック抑うつ尺度、自意識尺度、他者意識尺度、自尊感情尺度、セルフ・ハンディキャッピング尺度に関する計7枚の質問紙を配布し、回答に関する注意事項を述べたうえで回答させた。制限時間は特に設けずに行ったが、実際に所要時間は10分から15分程度であった。また質問紙は綴る順



序を変えた2パターンを作成した。また、フェイスシートでは学年や性別なども回答させた。

## 結果

### 1. 平均と標準偏差

得られたデータの全体および学年別と男女別の平均と標準偏差(SD)を表2-1, 2-2に示す。

表2-1 全体の平均とSD(106名)

尺度	平均	SD
ベック抑うつ	10.54	7.59
公的自意識	54.12	11.34
私的自意識	47.48	9.20
外的他者意識	12.42	2.99
空想的他者意識	13.05	3.27
内的他者意識	24.39	5.29
自尊感情	31.91	7.12
SHC	79.42	9.81

表2-2 群別の平均とSD

尺度	1年(45名)		2年以上(61名)	
	平均	SD	平均	SD
ベック抑うつ	11.04	8.35	10.16	7.03
公的自意識	56.51	11.66	52.36	10.86
私的自意識	47.00	9.67	47.84	8.90
外的他者意識	12.42	2.64	12.41	3.24
空想的他者意識	13.22	3.38	12.92	3.20
内的他者意識	24.44	4.74	24.34	5.71
自尊感情	31.07	7.51	32.52	6.82
SHC	79.93	9.22	79.05	10.29

  

尺度	男(66名)		女(40名)	
	平均	SD	平均	SD
ベック抑うつ	10.70	7.67	10.28	7.56
公的自意識	52.89	11.56	56.15	10.80
私的自意識	46.23	9.89	49.55	7.61
外的他者意識	12.39	2.77	12.45	3.35
空想的他者意識	13.17	3.21	12.85	3.39
内的他者意識	24.52	5.38	24.18	5.21
自尊感情	32.09	7.09	31.60	7.26
SHC	79.21	8.32	79.78	11.99

### 2. SHC平均の群間差に関するt検定

表2-2におけるSHCに関する平均の差の有意性を、あらかじめ分散の等質性検定( $F$ 検定)を行った上で(結果は有意差なし)、 $t$ 検定により検討したが(表3)、学年間および男女間ともSHCの平均には、統計的に有意な差は認められなかった。

表3 SHCにおける群間差のt検定

従属-独立変数	$F$	$p$	$t$	$df$	$p$
SHC-学年	0.012	0.913	0.457	104	0.649
SHC-性別	2.102	0.150	0.285	104	0.776

### 3. SHCと各性格特性との相関係数

セルフ・ハンディキャッピング(SHC)尺度とベック抑うつ尺度、自意識尺度、他者意識尺度、自尊感情尺度の相関係数について、全体および群別に求めたものを表4に示す。

1) 全体について：有意な正の相関があったのは「ベック抑うつ」「公的自意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」、一方、有意な負の相関があったのは「自尊感情」であった。

2) 学年について：1年で有意な正の相関があったのは「ベック抑うつ」「公的自意識」「外的他者意識」、また「空想的他者意識」で弱い正の相関がみられた。一方、有意な負の相関があったのは「自尊感情」であった。

つぎに2年以上で有意な正の相関があったのは「外的他者意識」「空想的他者意識」、また「ベック抑うつ」「公的自意識」で弱い正の相関がみられた。有意な負の相関はなかった。

3) 性別について：男で有意な正の相関があったのは「外的他者意識」、また「ベック抑うつ」「公的自意識」「空想的他者意識」で弱い正の相関がみられた。一方「自尊感情」で弱い負の相関がみられた。

つぎに女で有意な正の相関があったのは「公的自意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」、また「ベック抑うつ」で弱い正の相関がみられた。一方「自尊感情」で有意な負の相関があった。

表4 全体および群別のSHCと性格特性の相関係数

ベック 抑うつ	自意識		他者意識			自尊 感情	
	公的	私的	外的	空想的	内的		
全体 (106名)	.325**	.381**	.071	.497**	.362**	.146	-.331**
1年 (45名)	.413**	.531**	.144	.451**	.371*	.095	-.542**
2年以上 (61名)	.258*	.276*	.023	.523**	.356**	.174	-.176
男 (66名)	.304*	.311*	.011	.420**	.302*	.096	-.273*
女 (40名)	.365*	.487**	.159	.573**	.442**	.215	-.404**

### 4. SHCと性格特性バッテリーとの重回帰分析

被験者全体についてSHCを従属変数、性格特性の計7尺度を独立変数とする重回帰分析を変数一括投入法で行ったところ、重相関係数は $R = .649$  ( $p < .000$ )とかなり高い値となった(表5-1)。

そこで有意な標準偏回帰係数( $\beta$ )に注目すると、他者意識尺度の下位尺度である外的他者意識で $\beta = .412$  ( $p < .000$ )、ベック抑うつ尺度で $\beta = .255$  ( $p < .016$ )であった。なお、空想的他者意識においては $\beta = .208$  ( $p < .063$ )が見られている(表5-2)。

表 5-1 SHCを従属変数とする重回帰分析の結果

重相関係数 $R$	有意水準 $p$	重相関係数 $R^2$ 乗	自由度調整 済み $R^2$ 乗
0.649	0.000	0.421	0.380

表 5-2 重回帰分析における標準偏回帰係数

独立変数	標準偏回帰 係数( $\beta$ )	$t$	$p$
ベック抑うつ	0.255	2.456	0.016
公的自意識	0.135	1.357	0.178
私的自意識	-0.026	-0.288	0.774
外的他者意識	0.412	4.724	0.000
空想的他者意識	0.208	1.879	0.063
内的他者意識	-0.115	-1.057	0.293
自尊感情	-0.078	-0.755	0.452

## 考察とまとめ

### 1. 予測1の検証

相関分析において「自尊感情」が低いものはSHC行動を選択しやすいという結果がみられた。このことから「自尊感情」が高いものほどSHC行動を選択しにくいといえる。したがって「自尊感情」が高い者ほど、SHC行動を選択しやすい」という予測1とは異なる結果となった。自尊感情の高さは予測1でも述べたように自身を「これでよい」と感じることであり、自己に関する尊敬を示す。自己に関する尊敬が成功への自信に繋がり、SHC行動を選択する必要はないということにつながるのではないかと考えられる。一方「自尊感情」が低い者に関しては、自己に関する尊敬を欠いていることから、成功よりも失敗を強く意識すると捉えることができる。すなわち失敗を強く意識するからSHC行動を選択しやすいのであろう。

### 2. 予測2の検証

自意識については、「公的自意識」とSHC行動の選択には有意な正の相関があったため、予測2は支持されたといえる。「私的自意識」については、どの群においても相関はみられなかった。外から見える自己と、外からは見えない自己では、外から見える自己の側面への注意を向ける人ほどSHC行動を選択しやすいという結果となっている。

他者意識については「外的他者意識」「空想的他者意識」とSHC行動の選択に有意な正の相関があった。他者の気持ちや感情などの見えない内面情報と、外面に現れる特徴など見える外面情報では、他者の外面情報について注意を向けやすい人ほどSHC行動を選択しやすいといえるであろう。

この傾向は、学生ならではの傾向かは明らかではないが、大学生は、学生同士だけでなく、アルバイトやボランティア、教育実習や就職活動など社会との繋がりを持つことが多くなる。そこでの新しいコミュニテ

ィを形成する時には、第一印象が非常に大切であるため、自意識、他者意識とも、外面を強く意識するのではないかと考える。学生の形成するコミュニティについても関連させることで明らかにできるのではないだろうか。

### 3. 重回帰分析の結果

重相関係数はかなり高く、2つの独立変数の標準偏回帰係数が有意(もう1つは有意な傾向)であったことから、SHC行動に対して性格諸特性は「複合的」に関係している可能性が認められた。具体的には他者意識と傾向がともに高水準にある人は、SHCに頼る傾向が強くなるといえるであろう。

### 4. まとめ

調査対象を教育学部生に限定したため、ここで得られた特徴は、教育学部生固有の特徴であるか、大学生一般に当てはまる特徴であるのかは明らかでない。今後は他学部の学生も対象に含めた研究ができれば、より一般性のある知見が得られるであろう。

また本研究では明らかにできなかった、学生におけるSHC行動として、具体的にどんな行動があるのかを把握することも重要である。そのためには実際に学生が直面するような課題を設定し、その課題の遂行に対してどのような行動を選択するのかを自由記述してもらような質問紙に作成することが、今後の研究課題として挙げられる。さらにSHC行動を選択することでの周りへの影響なども明らかにできればより良い研究となるであろう。

### 引用文献

- Arkin, R. M., & Baumgardner, A. H. (1985). Self-handicapping. In Harvey & G. W. Weary (Eds.) *Attribution: Basic issues and application*. New York: Academic Press, pp.169-202.
- Baumgardner, A. H. (1991). Claiming depressive symptoms as a self-handicap: A protective self-presentation strategy. *Basic and Applied Social Psychology*, 12, 97-113.
- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., Mock, J. E., & Erbaugh, J. K. (1961). An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, 4, 561-571.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: The Guilford Press.
- Berglas, S., & Jones, E. E. (1978). Drug choice as a self-handicapping strategy in response to noncontingent success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 405-417.
- Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.

- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Harris, R. N., & Snyder, C. R. (1986). The role of uncertain self-esteem in self-handicapping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 451-458.
- Harris, R. N., & Snyder, C. R., Higgins, R. L., & Schrag, J. L. (1986). Enhancing the prediction of self-handicapping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1191-1199.
- 林 潔(1988). Beckの認知療法を基とした学生の抑うつについての処置. 学生相談研究, **9**, 97-107.
- 林 潔・瀧本孝雄(1991). Beck Depression Inventory(1978年版)の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての一考察. 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- Higgins, R. L. (1990). Self-handicapping: Historical roots and contemporary branches. In R. L. Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping: The paradox that isn't*. New York: Plenum, pp.1-36.
- Jones, E. E., & Berglas, S. (1975). *Strategies of externalization and the appeal of alcohol and drugs*. Paper presented at the UCLA Conference on the Social Psychology of Drug and Alcohol Abuse, Los Angeles.
- Jones, E. E., & Berglas, S. (1978). Control of the attribution about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 200-206.
- 沼崎誠・小口孝司(1990). 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元. 社会心理学研究, **5**, 42-49.
- Rhodewalt, F. (1990). Self-handicappers: Individual differences in the preference for anticipatory, self-protective acts. In R. L. Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping: The paradox that isn't*. New York: Plenum, pp.59-106.
- Rhodewalt, F., & Fairfield, M. L. (1989). Claimed self-handicaps and the self-handicapper: The effects of reduction in intended effort on performance. Manuscript submitted for publication. University of Utah, Salt Lake City.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton Univ. Press.
- Shepperd, J. A., & Arkin, R. M. (1989). Self-handicapping: The moderating roles of public self-consciousness and task importance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 252-265.
- 菅原健介(1984). 自己意識尺度(Self-consciousness scale)日本語版作成の試み. 心理学研究, **55**, 184-188.
- Tice, D. M., & Baumeister, R. F. (1990). Self-esteem, Self-handicapping and self-presentation: The strategy of inadequate practice. *Journal of Personality*, **58**, 443-464.
- 辻平次郎(1993). 自己意識と他者意識. 北大路書房.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

#### 参考文献

- 伊藤忠弘(1991). セルフ・ハンディキャッピングの研究動向. 東京大学教育学部紀要, **31**, 153-162.
- 沼崎誠・和田万紀(1990). “いいわけ”が受け手に与える印象—セルフ・ハンディキャッピング的“いいわけ”—. 日本心理学会第54回大会発表論文集, 159.
- 辻平次郎(1987). 自己意識と他者意識(1). 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 514-515.